

その他（活動報告）

タイ・セント・ルイス大学夏期短期研修（2015）報告

鶴生川恵美子, 巴山玉蓮

群馬県立県民健康科学大学

目的：タイと日本の看護教育についての理解と両大学間の異文化交流を意図して行われたセント・ルイス大学における夏期研修の内容を俯瞰し、研修の目的を達成することのできた有意義な研修であったことを報告する。

方法：6日間にわたる研修期間の日程に従い、研修内容の概略を説明する。セント・ルイス大学及び病院など施設見学に関しては講義及び資料を中心に述べる。最後に、研修に関する意義及び今後の課題について検討する。

結果：講義を通じて、タイと日本における看護教育及び健康問題についての理解を深め、交流パーティーによって学生間の異文化交流を図ることができたこと、また、野外学習によっても、異文化理解を深めることが可能となった短期夏期研修であったことを示すことができた。

結論：本研修は、今後の夏期短期研修の在り方を再考し、よりよい研修の構築を目指す契機となった。

キーワード：夏期研修, タイと日本における看護教育, 異文化交流, 野外研修

1. はじめに

2005年の開学から隔年で米国・シアトル・パシフィック大学(Seattle Pacific University: SPU)において3回の夏期研修が実施され、2012年には韓国高麗大学校での夏期研修が実施された。加えて、昨年2015年には初めてタイ国セント・ルイス大学(Saint Louis College: 以下 SLC と記す)での夏期研修が行われた。2013年度に SLC の看護学部との国際交流協定が締結されたが諸般の事情により、2年後の実施となったが、充実した研修を無事、終了することができた。

米国 SPU における研修とは異なり、SLC では英語の語学研修は企画しなかったが、教員、学生ともに英語を日常的に話し、英語による意思疎通が必須であるため、おのずと学生は自身の英語力を試す機会を得ることができたといえる。

本論は、2015年8月16日から22日までの6日間にわたる夏期短期研修の実践報告である。セント・ルイス大学及び関連施設における講義および研修内容と共に、各々の施設の概要について俯瞰することによって、両国の看護教育や病院の機能について認識を深め、今後の研修のあり方や課題について示唆を得たので報告する。

2. 研修目的と内容

1) 本研修の目的

- (1) セント・ルイス大学の教員による講義および現地での施設見学を通して、タイにおける高齢者看護について理解を深める。
- (2) セント・ルイス大学の教員および学生との交流を通して、コミュニケーション能力の向上を図るとともに、幅広いものの見方や考え方を養う。

表1 研修日程表

日時	時間	研 修 内 容
8月16日(日)	午前 午後	成田空港からタイへ向けて出発 タイ・スワンナブーム空港到着 セント・ルイス大学へ
8月17日(月)	午前 午後	セント・ルイス大学内で看護学部教授による講義 1) 'Health Profile in Thailand' by Assoc. Prof. Dr. Puangtip from SLC 2) 'Nursing Education in Japan' by teachers from GCHS 3) 'Seminar of the Information for Higher education between Thailand -Japan' by Laiad Jamjan Ed. D, RN 施設見学：セント・ルイス病院 (Saint Louis Hospital) セント・ルイス大学と同敷地内に建つセント・ルイス病院の看護部及び、放射線部門の施設 (MRI や CT 検査室) の見学
8月18日(火)	午前 午後	施設見学：高齢者施設 (Elderly Home in Lamsai District) 異文化体験：タイ古式マッサージ Wat Yannawa/ the boat temple (タイの寺院) 見学
8月19日(水)	午前	異文化交流 1) タイと日本における高齢者看護についてのプレゼンテーション * 'Nursing Care for Elderly People in Japan' by students from GCHS * Video Presentation on care for elderly people in Thailand by students from SLC 2) 群馬県及び大学 (GCHS) に関する本学学生による英語プレゼンテーション 3) だんべー踊りとタイの古典的踊りの披露 4) 折鶴づくりやゲーム
8月20日(木)	全日	異文化体験：アユタヤ遺跡見学
8月21日(金)	午前 午後	研修を終えての反省・まとめ 異文化体験：日本とタイのカレーとタイのスイーツ作り 昼食会 タイ・スワンナブーム空港を出発
8月22日(土)	午前	成田空港着 帰宅

2) 研修内容

2つの目的を念頭に置き、本学の担当者である筆者とSLCの看護学部長、国際交流委員会担当教員および職員との間で、eメールを通じて研修計画がコーディネートされた。

なお、セント・ルイス大学及び大学外での研修の日程は表1のとおりである。

[8月17日] 午前：講義、プレゼンテーション

セント・ルイス大学到着の翌日、大学内のconference roomにて、CLC学長Dr. Emeritus Chitr Sitthi-amornと初めて対面した。Dr. Emeritus Chitr Sitthi-amornは、天皇陛下に謁見

した経験を有する親日家であった。日本と同様に、タイにおいても高齢化社会の抱える問題があることについて言及し、長生きをすることが重要なのではなく、いかに健康で長生きするか、つまり、健康寿命をいかに延伸するかということが重要であることを述べられた。

その後、3つのテーマについてSLCとGCHSの両大学の教員によるプレゼンテーションが行われた。

(1) SLCの准教授Dr. Puangtip による 'Health Profile in Thailand' というテーマの講義
英語に慣れない学生のために、英語に慣れさせることに焦点を置き、ゆっくりと丁寧に質問を交

え、高齢化社会という同じ状況を抱えたタイと日本を対比させながら、平均寿命や医療全般について説明して下さった。

タイの人口の80%はタイ人、次に中国人(10%)、マレー人(7%)、そのほか少数民族からなる。宗教は、仏教が主な宗教で、90%が仏教徒である。そのほかの宗教には、イスラム教、キリスト教、ヒンズー教がある。

言語は、タイ語が公用語であるが、その他中国語、マレー語も話される。公立学校では、英語は必修科目であり、特にバンコック、そのほか主要都市で使われている。12年間の義務教育は無料で、セカンダリー教育の拡大と教育の質の向上に焦点を置いている。それらはともに、人間の発達を深めるとともに、国の競争力を高めるために必須であると考えられているからである。15歳以上の全人口の約93%は読み書きができ、タイの識字率はかなり高い。

平均寿命は上昇しており、2013年では、タイの平均寿命は75歳で世界67位、男性は71歳(77位)、女性は79歳(53位)であった。

健康には様々な要因が関連しており、個人的、環境的なレベルの両方での変化を包括的に考慮することが必要である。健康サービス制度(health service system)と同様に、経済、教育、家族の特徴、遺伝、価値観と信仰、文化、政策と政治、インフラと技術などである。

(2) 本学教員による 'Nursing Education in Japan' についてのプレゼンテーション

日本の看護教育について、日本看護協会のホームページ¹⁾からの資料をまとめ発表した。以下はその概略である。

日本において看護師になるための教育機関は大学、短期大学、看護学校の3種類であり、看護師のほかに、保健師、助産師の国家試験受験資格を得ることができる。

初めての看護系大学は1952年に開学し、その当

時はわずか10校に過ぎなかったが、1992年、看護師やそのほかの医療従事者の数の増加をめざし、看護師等の人材確保の促進に関する法律(Act on Assurance of Work Forces of Nurses and Other Medical Experts)が施行され、出生率の減少、及び大学進学者の増加により、看護学校の数は増加の傾向をたどった。

看護師の中には、さらに専門性を追求した看護師資格が3種類ある。

- ① Certified nurse (CN)
- ② Certified Nurse Specialist (CNS)
- ③ Certified Nurse Administrators (CNA)

看護に関して現在抱えている問題は、看護師不足(nursing shortage)と高い離職率(turnover rate)である。看護大学の増加に伴い、新卒の看護師は増加しているが、高い離職率が大きな課題となっている。主たる原因には、長時間労働、夜勤、シフトワークに合わない低賃金などの労働環境によるものと、結婚や育児、家族や両親の健康問題など個人的な問題の2点があげられる。

10年後の2025年に、ベビーブーム世代の大人が、75歳以上に達するために、看護の人材を確保する必要がある。そのために期待されることは、政府が実施してきている方策が看護の労働環境に浸透することである。

- (3) SLC看護学部長であるLaiad Jamjan教授による、'Nursing Education in Thailand' というSLC看護学部の歴史やタイの看護教育についての講義

看護教育は、若者の教育を提供する場として始まり、1898年9月15日にセント・ルイス病院が創設された。SLCはバンコックにあるARCHDIOCESES(カトリック大司教区)に所属する私学の高等教育機関である。Philosophyは「慈悲あるところに神あり」の意味である、'UBI CARITAS, IBI DEUS EST' ("where there is mercy, there is God")。

1975年, Nurse Aide Training School, 1985年, School of Nursing, 1999年に現在の Saint Louis College へと成長した。大学としての哲学体系 (philosophy) は “Cheerfulness, Inquiry, Excellent caring, Virtue, Health providing leader.” (「快活さ,」 「探究心」 「優れたケア」 「美德」 「健康を提供する指導者」) であり, 大学の展望 (vision) は “FON (Faculty of Nursing is a center of trans-cultural nursing among the neighboring country with an international standard” (「国際的基準を持ち, 近隣諸国との異文化間の看護の中心的存在となること。」) である。

1985年 Bachelor of Nursing Sciences, 2003年 Master of Nursing Sciences (Nursing Administration), 2005年 Master of Nursing Sciences (Advance Nursing Practice), と各学位の習得が可能になった。

タイの看護教育課程は, 高等学校卒業後, 1年の修学で practical nurse に, 大学 (4年) 卒業後に BNS, 修士課程 (2年) 修了後に MNS, 博士課程 (3年) 修了後に Ph. D の学位をそれぞれ取得することができる。卒業生は, 看護師, 助産師の資格を得ることになる。

〔8月17日〕 第一日目午後：セント・ルイス大学, セント・ルイス病院の見学

セント・ルイス大学と, 同敷地内にあるセント・ルイス病院 (Saint Louis Hospital : 以下 SLH と記す) を見学した。以下, セント・ルイス大学及びセント・ルイス病院についての概略は, 職員や教員による説明及び, それらに関するパンフレット²⁾を参考にした。

(1) セント・ルイス大学

SLC は, タイの首都バンコックの中心部 (19 South Sathorn Road, Yannawa, Sathorn, Bangkok) にあり, 主要な高速道路, スカイ・トレイン (sky train), そのほかの交通機関が利用し

やすい位置にある。大学のキャンパスは, 12棟の建物を含むセント・ルイス病院内に位置し, この敷地内で学生の生活に係る必需品は入手可能となっている。学生は寮生活, 通学の選択が可能で, すべての学生が寮生活をするわけではない。

2015年, 30周年を迎えたセント・ルイス大学は, 1977年に, ‘practical nursing school’ として設立され, 1985年に, セント・ルイス看護大学 (Saint Louis Nursing College) となった。1999年には, 健康科学大学として貢献すべく, 看護学部 (Faculty of Nursing), 理学療法学部 (Faculty of Physical Therapy), 心理学部 (Faculty of Psychology) の3学部を備え, セント・ルイス大学と改名した。

SLC は, 多種多様な文化や宗教の混在する環境の中で生活を営むタイの人々に, 質の高い教育を提供することをキリスト教徒としての貢献と考え, 設立された大学である。大学の使命は, 専門分野において優れ, タイの文化や伝統を尊重しつつ, カトリック教のサービスの精神を社会に提供し続けることのできる卒業生を輩出することとしている。

SLC では, 常勤, 非常勤ともに, 専門分野における修士, 博士の学位をもった質の高い指導者が少人数クラス制の授業を受け持っている。授業においては, リーダーシップと奉仕の心を兼ね備えた生活と生涯にわたる学習を目指し, 彼らの可能性を引き出せるよう指導している。(写真1)



写真1 セント・ルイス病院の裏に位置するセント・ルイス大学

(2) セント・ルイス病院の見学

SLH の職員から、スライドを用いて病院についての丁寧な説明を受けた。その後、各病室、放射線関連の検査室、託児所等を見学した。以下は、その際に配布された資料及び、セント・ルイス病院のパンフレット³⁾を参考にした概略である。

SLH は、約32,000平方メートルの敷地内にあり、最新の医療設備が配備され、患者中心の理念を重要視している。このような理念の基、すべての分野の医師と看護師によって、入院患者や外来患者に対し治療や最良の看護が提供されている。

看護部門は、外来部門、入院部門、教育部門(患者教育含む)に分かれており、看護師の総数は275人、准看護師153人、看護助手48人、病棟事務18人、その他の職員140人であった。看護方式は原則としてチームナーシングであり、3交代制を採用している。ICU、CCUは2交代制であった。通常の病棟の人員配置は日勤帯では8～10人うち看護師は4～5人、準夜勤務帯では8人うち看護師は4人、深夜帯は5人うち看護師は2人であった。キャリアパスとしては、看護師4レベル以上はCNSへのコースがあり、看護師の3レベル以上は、看護師長、看護副部長、看護部長というコースが準備されている。

最新の医療設備が患者の診断や治療のために、効果的に整えられている。入院患者の病室には、エアコンが完備され、ICU及びCCUは個室となっているが、中央集中管理システム(セントラル・モニタリング・システム)により安全が確保されている。

28の専門分野のクリニックに加えて、Heart Institute (心臓)、Check-up Center (健康診断)、Internal Medicine (内科)、Surgery Center Department (外科)、Elderly Care Center (高齢者ケア)、Hemodialysis Center (血液透析)、Emergency Center (救急)などを含む13のセンター(Specialized Center)が備えられている。

SLHにおいて特に特徴的であると思われる3つの機関について詳述する。

① Heart Institute

タイにおいて最も一般的な病気の一つである心臓病(死因の第一位)を専門的に扱う機関である。効果的な治療法は心臓病診断において経験豊かな技術の高い医師と最新の医療機器を使った治療による。Heart Instituteの目的は以下のとおりである。

- *心臓病の治療に即対応できる準備を整える
- *心臓疾患治療において能力があり、専門性が高い医療及び外科の専門医の確保
- *必要な最新の医療機器の準備を整える

Heart Instituteに携わるメンバーは、4人のコンサルタント、そのうち3人は心臓専門医、もう一人は心臓外科医である。さらに、心拍異常の専門医が3人、心臓カテーテルと冠動脈バルーン血管形成術の専門医が5人、小児心臓専門医が5人、心臓外科の専門医が3人である。

② Day Care Department (デイ・ケア)

片親もしくは、両親が外で働く場合の親の負担を軽くするために、Child Development Departmentが、子どもの養育や発育のサービスを行っている。訓練を受け、子どもの養育に関して経験のある看護師やベビーシッターのケアのもとで、子どもたちは、楽しく学び、遊びながら知識を獲得することに重点を置くことによって養育される。

サービスの内容には、1) 生後2か月から3歳の子供のケアと発達、2) 月単位の育児、3) 6時から9時までの育児(全体で13時間)がある。

③ Pastoral Care Division

(パストラル・ケア)

Pastoral Careは、SLCの使命であり、1) 質の高い、人道的なケアを提供し管理する、2) 患者とスタッフの健康と幸福を向上させる、3) 高度な技術を習得した医療従事者の提供、を目的と

している。

牧師及び聖職者は、患者を訪問し、彼らの病気に対する不安、痛み、恐怖などの感情に耳を傾け、必要とする時期に励ましの言葉をかけることや、精神的なサポートを職務とする。



写真2 セント・ルイス病院



写真3 セント・ルイス病院内：講義を終えて

[8月18日] 午前：高齢者施設 (Elderly Home in Lamsai District) の見学

看護学部の community nursing (地域看護学) 准教授, Dr. Jintana の案内で SLC と関連のある高齢者施設 (Elderly Home in Lamsai District) を見学した。施設は、大学から車で一時間ほどの郊外に位置し、自然に囲まれた閑静な地域に建っていた。広大な敷地内にゆったりと贅沢に建てられた施設全体は八角形になっており、それぞれが8カ所の個別の施設になっていた。各施設は吹き抜けの通路でつながり、通路からは、木々や花々

に満たされた自然あふれる中庭を眺めることができた。看護師兼シスターを施設長とし、10名程のスタッフ (practical nurse, nurse aid) が20数名の高齢者の世話にあっていた。各人の部屋のほかに、簡単な健康器具が配備されたりハビリセンターや礼拝堂などの設備も整っていた。八角形の施設の中央にある大きな広場では、入居者が食事をしたり、娯楽をして楽しんだりすることができる。研修当日は、学生は入居者とともに、この広場で一緒に歌を歌ったり、中には日本語のわかる高齢者もあり、英語と日本語を混ぜて会話を楽し



写真4 施設正門



写真5 施設内



写真6 中央広場にて

んだ。また、学生は、昼食の配膳、車いすを押して部屋への移動などの手助けを行い、高齢者との交流をしばし楽しんだ。

[8月18日] 午後：タイ古式マッサージの体験

バンコク市内にあるタイマッサージ施設において、タイ古式マッサージを体験した。

タイ古式マッサージは、タイ伝統医療の一部であり、指圧による揉み動作だけでなく、四肢を曲げ伸ばしするストレッチを含むマッサージである。インドで成立した仏教医学やアーユルヴェーダの影響を受けていると考えられている。そのルーツはおよそ2500年前にさかのぼるとされ、仏教の伝来とともにタイの寺院で発展した。宮廷においては、マッサージ師は比較的高い職位であり、宮廷医療と栄養近代医療が併用されたが、1915年にタイの伝統医療による治療、教育は禁止された。しかし、その後、1978年の「アルマ・アタ宣言」で、WHOがプライマリケアという保健医療政策の理念とその方向性を示し、各国の伝統医療の復興に寄与したため、1990年の「タイ古式医療の制度化」によって、タイ伝統医療の一部として復活⁴⁾した。

[8月19日] 午前：異文化交流

SLC 大学内の Auditorium において両大学の学生による発表を通じて異文化交流を図った。本学の参加学生は、日本における高齢者の医療について9名の学生が担当し、英語で発表した。その後、2名の学生による群馬県に関するプレゼンテーション、及び1名の学生による大学紹介が、英語によって行われた。出発前に原稿作成や発表準備を行った結果を示すことができた。

SLCの学生からは、学生が出演し作成された家庭における高齢者とのかかわり合いについてのビデオが上映された。

その後、お互いの国の踊りを披露し、異文化交

流を図ることができた。本学学生によるダンベーパー踊りでは、タイの学生も参加することによって、学生間の交流がさらに深められた。

(1) 学生によるプレゼンテーション①

‘Nursing Care for Elderly People in Japan’ というタイトルで、日本看護協会のホームページ⁵⁾からの資料を基に原稿を作成した。次に示すのは、その概略である。

日本における高齢化は世界的にも顕著であり、その傾向はタイにおいても同様である。2060年に、65歳以上の高齢者が占める割合は、世界1位で40%、タイにおいては世界4位で27%になると予測されている。日本の総人口は、低い出生率のため、若者の人口が減少し続け、2010年の約1億3千万人から、2060年には、8千7百万人にまで減少する見込みのため、高齢者の割合が高くなる。2060年には、1人の高齢者を1.2人で支えることになる。(写真7)



写真7 学生によるプレゼンテーション①

伝統的に、日本人は高齢者とともに生活をしながら世話をしていたが、核家族の増加による生活スタイルの変化により、子どもと共に生活する高齢者の割合は、1980年の70%から2012年には約42%にまで減少しており、さらに減少の一途をたどることが予想される。

高齢者の割合が高まると同時に、医療費が増加し、GDPの7.8%を占める。長期医療保険制度(Long-Term Care Insurance)のもとで、被保

険者であるならば、長期の医療サービスを受けることができる。施設におけるサービス (facility services)、家庭におけるサービス (home-based services)、地域におけるサービス (community-based services) の3種類がある。facility services は、nursing home やそれに準じた施設などに滞在するサービスを提供する。home-based service は、家で生活することを基本とし、訪問看護やデイサービスなども受けることが可能となる。community-based service では、市町村によって管轄され、認知症の高齢者のためのグループホームでのサービス提供が含まれる。

1982年、老人保健法 (The Law of Health and Medical Services for the Elderly) が制定されてから、家庭をベースとした看護のための法的な土壌が築かれた。2000年には、Gold Plan 21が制定され、2006年は9,900の訪問看護ステーションの設立が期待された。訪問看護の利用者の増加に伴い、ステーションの数もわずかながら増加している。

しかし、ステーションの規模は小さく、そのため労働効率が低くなり、スタッフへの負担も大きくなるという課題もある。全ての利用者のニーズを満たすことは不可能であるが、高齢者が家庭で生活できるようにするために、安定した切れ目のないサービスを提供することが基本である。

(2) 学生によるプレゼンテーション②

On Gunma Prefecture and GCHS というタイトルで3名の本学学生によって群馬県及び本学について紹介された。群馬県のホームページ⁶⁾ から得られた資料をまとめ原稿を作成した。群馬県の地理的特徴(位置、気候等)、特産物、自然などについて紹介した。特に、うどんなどの麺類、まんじゅうなどの粉食文化が盛んであること、また、養蚕が盛んであったことから、絹織物で有名であることを、タイとの共通点として示した。昨年度世界遺産に録された富岡製糸場にも言及し、富岡の地に官営工場が設立されるまでの歴史的背景に

についても触れた。

大学については、開学10周年にあたるということで、開学から現在にいたるまでの歴史、及び大学の学部、学生数、サークル等学生生活、校内の様子等を写真と合わせて紹介した。



写真8 学生によるプレゼンテーション②

(3) Video Presentation on Care for Elderly

People in Thailand by students from SLC

SLCの学生有志数名によるビデオ作品を鑑賞した。

タイの高齢者を抱えたある家族の様子をビデオにしたものである。母親は、自分の母親の面倒を娘に託し、外出する。娘は、祖母のことはお構いなしでゲームに夢中になっている。トイレに行きたいといっても、自分で行けるでしょ!と行って、相手にしてもらえぬ祖母は、仕方なく自力でトイレに向かう。娘がゲームに飽きて、ふとあたりを見回すと、祖母の姿は見当たらない。そこへ母も帰宅する。二人はあわてて祖母を探すけどどこにいるのかわからない。そこへ近所の人と外から帰ってくる祖母がいた。それからというもの、母と娘は祖母を大事にし、ともに家で歌を歌ったり踊ったりしながら、祖母を一人にしないように心掛けるようになるというストーリー。最後は、母よりも若く、娘と同じくらい若々しくなった祖母が、誰よりも疲れを知らず、踊っているというユーモアたっぷりのおちで聴衆を沸かせた。日本における高齢者の姿にも重なるところがあり、多くの学

生は共感の目を持って鑑賞することができた。

(4) ASEAN Friendship Party

SLCの学生代表が司会進行を行い、本学学生によるだんべー踊りの披露、SLCの学生による古典的タイの踊りの披露に続き、折鶴づくりやボールゲームに興じた。学生主体の交流は、2大学の学生間の友好的な絆を育むよい機会となった。



写真9 ASEAN Friendship Party ①



写真10 ASEAN Friendship Party ②

[8月20日] 午前～午後 異文化体験：アユタヤ遺跡見学

SLCから、車で約1時間半ほど離れた場所に、世界遺産の一つであるアユタヤ遺跡がある。

1350年、ウートン王によって開かれたアユタヤ王朝の首都アユタヤは417年に渡り、33代の王といくつかの王朝が統治した。チャオプラヤー川沿いの水路に恵まれたこの都市は東南アジア各国の文化を融合し繁栄した。17世紀にはイギリス、ポルトガルなどの西欧諸国との交易も盛んに行い、国

際貿易都市として名をはせ、大国の歴史上大きな功績を遺した王朝といえる。その一方、王位継承争いや、ビルマ軍の侵攻が重なり、1767年、ビルマ軍からの激しい攻撃によって、その長い歴史の幕を下ろすこととなる。1991年、12月ユネスコ世界文化遺産に指定された、アユタヤ中心部に広がるアユタヤ王朝の遺跡群はアユタヤ歴史公園と呼ばれ、数多くの寺院や、仏像が残されている⁷⁾。

木の根の間に挟まった仏頭、頭部を切りおとされた仏像や崩れ落ちた礼拝堂の土台の残骸を目にして、当時のビルマ軍侵攻の激しさを想像した。その半面、難を逃れた黄金の仏像や見事な彫刻を施された工芸品、壁画や天井画などから優雅なアユタヤ文化に思いを馳せることもできた。アユタヤ王朝時代の繁栄の時代と残虐な戦争の痕跡を目の当たりにし、一部ではあるが、タイの歴史に触れる良い機会となった。

[8月21日] 午前：研修を終えての反省・まとめ (Wrap-up & Evaluation)

国際交流の担当者でもある、Jintana 准教授からアンケートの依頼があり、学生及び教員が回答した。また、今後の研習改善のために、今回の研修における要望などについて意見を求められた。

SLCの担当者から依頼されたアンケートでは、学生による評価は全体的に、5段階評価で4以上を示していたことから、研修内容に関してはほぼ満足であったことが示唆された。学生からの意見の中には、「看護学部の授業に参加したかった。」という意欲的な姿勢が窺えるものもあった。同時に、SLCの先生方の講義や施設での担当者による英語の説明が十分理解できなかったことに対する反省の声も多く聞かれ、今後の研修に際して行われる英語に対する準備について検討する必要性を感じた。さらに、学生たちは大学内の宿泊施設や食事など十分すぎる対応に感謝の意を表していた。

反省会后、異文化体験として Cooking Party が行われ、タイと日本のカレー、タイのデザートを作り試食した。この後、空港へ向かい帰国の途に就いた。

以上の研修内容における写真の掲載については、学生および関係者の許諾を得ている。

3. 今後の課題とまとめ

学生参加型の研修をめざし、プレゼンテーションの準備をして SLC 研修に備えることができたことは、準備の困難さはあったものの、参加学生に良い経験を提供できたといえよう。

学生は、反省点として、質疑応答における応答が思うようにできなかったことや、SLC や SLH における講義に対する理解不足について言及していた。しかし、SLC が本学学生に対して数名の buddy を選出しておいてくれたことにより、会話力や学生の交流は促進された。講義内容等のより深い理解を追求するためには、今後の研修にあたっての準備が課題となるであろう。

2 大学の国際交流協定締結の段階から、SLC からは単位互換ができる看護学部の実習の提供も可能であるという情報提供があった。しかし、本学国際交流委員会では 2 学部の学生が学年を超えて参加することを計画していたこと、本学 4 年次に履修可能な保健医療国際連携論においては、海外での実習を想定していないこともあり、初回でもあることから見学中心の夏期研修となった。今後は、語学力も含めて参加学生の条件を設定するのか、今回のような見学中心の夏期研修を継続するのかという検討も必要と考える。

謝 辞

夏期短期研修を実施するにあたって、SLC の教職員や学生 (buddy) から多大なるご協力とご支援を得たことを心より感謝いたします。また、爆弾テロという予期せぬ事態に対する適切な対応にも感謝いたします。

引用文献

- 1) *Nursing in Japan* Japanese Nursing Association <http://www.nurse.or.jp/jna/english/nursing/education.html> (2015.6.25確認)
- 2) *Saint Louis College —Shaping Future Compassionate Health Professionals—*(セント・ルイス大学発行のパンフレット)
- 3) *Saint Louis Hospital* (セント・ルイス病院発行のパンフレット)
- 4) タイ 古式 マッサージ <http://ja.wikipedia.org> (2016.8.22確認)
- 5) *Nursing for the older people in Japan* Japanese Nursing Association <http://www.nurse.or.jp/jna/english/nursing/education.html> (2015.6.25確認)
- 6) *Silk Industry, Location of Gunma, The Culture of Powdered Food & Local Dishes* GUNMACHAN NAVI <http://www.gunmachan-navi.pref.gunma.jp/en/food/culture.php> (2015.6.25確認)
- 7) アユタヤ遺跡 <http://www.thailandtravel.or.jp/common/pdf/show.cgi?pdf=/common/pdf/Ayutthaya201312.pdf&no=14> (2016.8.22確認)

Report on the Summer Study Program at St. Louis College in Thailand

Emiko Ubukawa, Gyokuren Tomoyama
Gunma Prefectural College of Health Sciences

Objective: The purpose of this report was to give a bird's-eye assessment of the first summer study program at St. Louis College (SLC) in Thailand and show that our goals for this program were successfully achieved.

Method: By reviewing the outline of the lectures and presentations by teachers and students at SLC and St. Louis Hospital (SLH), as well as the brochures they provided, we tried to convey the significance of the study program at SLC.

Results: This report gives an overview of SLC and SLH, the content of presentations conducted by the participants, how the participants interacted with the SLC nursing students at a cross-cultural party, and a short field trip taken by the participants.

Conclusion: This report gives participants the opportunity to reflect on the study program as a whole and to think of ways of improving the program.

Keywords: study program, nursing education in Thailand and Japan,
cross-cultural interaction, field trip